庾信の「蒙賜酒」詩について

矢嶋美都子

一、テーマの特異性

庾信（A.D五一三～五八一）が北朝に仕えた時代の作品に、人から酒を贈られたことに對する禮を述べた、一連の作品がある。『庾子山集』（以下收載書名略、卷數と詩題のみ記す）卷四に收載されている順に列擧すると、

①「蒙賜酒」
②「奉報趙王惠酒」
③「奉答賜酒」
④「奉答賜酒鵝」
⑤「正旦蒙趙王賚酒」
⑥「衞王贈桑落酒奉答」
⑦「答王司空餉酒」

①～⑥のうち、②と⑤は趙王から、⑥は衞王から、①③④は天子もしくは皇族からと推定されるが、いずれも庾信より身分の高い人から酒を賜って嬉しいと謝辭を詩にしたもので、⑦は同等（友人）の王褒から酒を贈られた禮の詩である。

これらの作品は、その詩題からも窺われるように、酒を賜った禮、謝辭を述べる詩であるが、これは從來の詩の領域には無いテーマである。もちろん酒そのものを詠じた詩、或は詩中に於いて酒に言及した詩は數多い。だが酒を贈られた禮の詩というのは『全漢三國晉南北朝詩』を通覽した限りでは、庾信の作品群が最初であって、テーマとして新しいものと言える。

そもそも酒に限らず物を贈られた禮を述べるといった事は、從來は表・啓・書・帖・牋等の散文の領域に屬するテーマであった。次の表は㊀『漢魏六朝一百三家集』、㊁『全上古三代秦漢三國六朝文』に據って禮狀の出現の情況を整理したものである。〔この表の作成に際して、表・啓・書・帖・牋等は時代により、又文體の上からも少しづつニュアンスが異なるが、物を頂戴した謝辭を述べるものであれば禮狀とみて數えた。他人の代筆の禮狀は省略した。表中の內容記事の項は頂戴した品名を記した〕

〈表一〉

時代	人名	作品數	種類	內容・記事
魏	曹操	1	表	九錫
〃	曹丕	1	書	玉玦（㊁の目錄には無い）

魏	曹植	4	表	食*、柰、鼓吹、穀（*印は㊁に無い）		
晉	王羲之	500以上	帖	帖であるが題からは誰に贈ったのか、又誰から贈られたのか不明。		
〃	孫楚	1	牋	鄣白		
宋	鮑照	1	啓	藥		
〃	謝希逸	1	表	貂裘		
齊	王融	6	啓	御裘等、米、納裘、紫酢、弓、銀鉢		
〃	謝朓	2	啓	左傳、紫梨、		
〃	褚淵	1	啓	珮（甲に無し）		
南齊	孔稚珪	1	啓	生荔枝		
梁	昭明太子	4	啓	地圖、水犀如意、制旨涅槃經講疏、制旨大集經講疏、銅造善覺寺塔露盤（甲に無し）		
〃	簡文帝	35	表2 啓28 書5	表―新曆（二） 啓―中庸講疏、扇、碧慮棊子屏風、玉佩、*魏國の獻じた錦等、善勝威勝刀、方諸劍等、紹坐褥席、織竹火籠、*廣州甌、*大菘、長生米、*邊城橘、益州天門冬、*河南菜、袭、柿、胡子一頭、銅供造善覺寺塔露盤、柏刹并銅萬斤、錢并白檀香克法會、苦行像并柱佛跡、解講錢、納袈裟（四）、錢（*印は㊁では昭明太子の作としている） 書―*胡子、王羲之書、舞簟、臥簟、飛白書屏風（*印は甲に無い）		
〃	元帝	18	啓	白牙鏤管筆、陸探微書、彈棊局、第、錦、辟邪子錦白褊等、紹蟬、褥、寶枕、花釵、瓜、合心花釵、馬、蒸栗牛、車螯蛤蜊、麈尾錦帔團扇等、功德淨饌一頭、功德食一頭。		
〃	邵陵王綸	1	啓	馬（甲に無し）		

梁	蕭欣	1	啓	甘露（甲に無し）		
〃	沈約	9	表2 啓7	表―絹、新曆 啓―甘露、冰、紗綢絹等、絹葛、母赫國雲氣黃綾裙襦、絹綺燭、北酢、		
〃	王僧孺	2	啓1 表1	表―曆、啓―干施利國の獻じた檳榔		
〃	陸倕	1	啓	朝服		
〃	劉孝綽	4	啓	藥、越布、孤石廟を祭る胙肉、米（㊁では米酒等となっている）		
〃	劉孝威	14	啓	五色藤筌蹄一枚（甲に無し）、紋絹燭等、橘（㊁は城傍橘に作る）、酒、銀鞶絲帶、柑（㊁は甘に作る）、蝦蟹、牛、馬、車牛、花紈簟、柰、鉢、宜城酒（甲は目録に無し集中に有り）		
〃	劉孝儀	12	啓11 書1	啓―官紙、錦被、畫屏風、熊白、聖僧餘饌、淨饌、婚錢、炭、鹿脯肉等、藕、牛、 書―林檎		
〃	庾肩吾	25	啓	曆日、銅硯筆格、粳米（二）、菱、棃、橘、林檎、朱櫻、檳榔（二）、米（三）、宅、內人春衣炭、柑、粟（㊁は栗に作る）、絹、白綺綾、朮煎、朮蒸、綾紋（㊁は綾綺と作り、書である）		
〃	任孝恭	2	啓	錢、裙襦、（どちらも甲に無し）		
陳←梁	徐陵	5	啓	祀三皇五帝餘饌、麞、蛤蜊、蛤、*烏賊（甲に無し）		
〃	周弘正	5	啓	春秋糊屏風、玉門棗、烏紗帽等、縠袍、紫酢（いづれも甲に無し）		
〃	江總	1	表	鼓吹		
〃	張正見	1	啓	錢		

梁←北周	庾信	13	啓	絲布等（四）、犀帶等、巾、白羅袍袴、米、乾魚、雉、馬并繖、馬、猪、（以上全て北朝での作である）
〃	王褒	2	啓	馬、絹
隋	煬帝	1	書	義疏

右表から、曹操の九錫への禮狀は特殊な物であるから除くとしても、まず曹操父子を中心とするサロンで始まり、梁朝になって禮狀の數が急增している事が看取される。これは梁の簡文帝元帝ら諸王子達のサロンの盛行に一因あると推察される。サロンでは詩の應酬と同時に相互に物をプレゼントしあい、又諸王子達は自分のサロンに集う文人達に物を下賜した。物を貰えば當然感謝の意を表わす啓を書くことになる。

また酒を贈られての禮狀は劉孝威に二例あるだけなのが注意される。

一方、禮狀（啓）の急增するこの時期に、物を贈られた謝禮の詩が新たに出現している。丁福保『全漢三國晉南北朝詩』に據ってみると、次の三例である。

- 梁の王筠の「答元金紫餉朱李」（元金紫の朱李を餉せしに答う）[1]
- 梁の任昉の「答到建安餉杖」（到建安の杖を餉せしに答う）
- 在梁時代[2]の徐陵の「爲羊兗州家人答餉鏡」（羊兗州の家人の爲に鏡を餉せしに答う）

因みに、人に物を贈った詩は次の四例がある。

- 梁の王筠の「摘園菊贈謝僕射擧」（園菊を摘みて謝僕射擧に贈る）
- 梁の劉孝綽の「詠有人乞牛舌乳不付因餉檳榔詩」（人の牛舌乳を乞う有るも付せず因りて檳榔を餉するを詠ずる詩）
- 梁の到溉の「餉任新安班竹杖因贈〔詩〕」（任新安に班竹杖を餉し因りて〔詩〕を贈る）。

同じく王筠の「摘安石榴贈劉孝威」（安石榴を摘みて劉孝威に贈る）

これらは梁朝の頃、友人同士が、物のやりとりを詩に詠ずるようになった事を示している。ただ酒をやりとりした詩は無い。

以上のことから、梁朝の頃に物を贈られた謝禮というテーマが散文（啓）の領域で大いに發展し、それが詩の領域に漸次移行し始めた情況が窺えよう。これには當時盛行した詠物詩の作用もあると思われる。

庾信の場合、在梁時代の禮狀は見えないが、そもそも在梁時代は庾父肩吾とともに王侯のサロンに於いて宮體の創始者として活躍したのであるから、その習俗に熟していたことは當然である（庾肩吾には右表に見る如く多量の禮狀が傳わる）。從って、庾信が北朝において「蒙賜酒」の一連の作を殘したことの基盤に、この風潮が作用しているのは明らかであるが、何故酒をテーマとしたかについては、更に檢討を加える必要がある。つまり、右表に據り、庾信が北朝において贈賜された物は酒に限らないのに、前例のない酒を特にテーマとしたか、ということである。その點を檢討するとともに、これらの酒の詩に見られる特色を考察しようというのが本論の目的である。

二、「蒙賜酒」等の内容の檢討

（一）修辭構成の特色

「蒙賜酒」等の作品の内容を檢討するに當り、庾信の酒を詠ずる詩についてそれが如何なる場面で詠じられているか、見ておくこととする。

庾信の詩は全部で約250首、その中で酒が詠出されている詩は41首ある。[3] この41首を詠じられた場面に據って分類すると次の四種に大別できる。

Ⓐ社交の具としての酒、具體的には宴會の席や遊樂の場、詩の應酬の際に詠じられた作品。24首ある。〔倍駕幸終南山和宇文内史。和宇文京兆遊田。謹贈司寇淮公。奉和示内人。奉和趙王春日。北園新齋成應趙王教。同會河陽公新造山池聊得寓目（以上巻三）。和樂儀同苦熱。和春日晩景宴昆明池。對宴齊使。聘齊秋晩館飲酒。和靈法師遊昆明池。詠春近餘雪應詔。暮秋野興賦得壺酒。春日離合其二。就蒲州使君乞酒。蒲州刺史中山公許酒一車未送。他に蒙賜酒等①～⑦までの詩（以上巻四）〕

Ⓑ隱者につきもの、隱者の友といった場面で詠じられた酒。5首ある〔園庭。歸田。臥疾窮愁。贈周處士。山齋（以上巻四）〕

Ⓒ天下・世事を忘れる事を述べる場面で詠じられた酒。5首ある〔和張侍中述懷。擬詠懷　其一、其十一、其二五（以上巻三）奉和永豐殿下言志其八（巻四）〕

Ⓓその他　7首ある〔歳晩出横門（巻三）。有喜致醉。西門豹廟。見遊春人。對酒。春日極飲。新月（以上巻四）〕

庾信は宮廷詩人のような立場で生きた詩人であるから量的にはⒶが多い。但だⒶの一部にはⒷの雰圍氣を出すものもある。ⒷⒸは庾信のプライベートな部分が顔を出した作品である。「蒙賜酒」等の一連の作品は、庾信の社交の詩、社交の具としての酒を詠じた詩と位置付け出來る。

以下内容について檢討する。先ず次の詩を見て見よう。

②「奉報趙王惠酒」

梁王修竹園　梁王の修竹園
冠蓋風塵喧　冠蓋　風塵喧し
行人忽枉道　行人　忽に道を枉げ
直進桃花源　直に進む桃花源
穉子還羞出　穉子　還た出づるを羞じ
驚妻倒閉門　驚妻　倒に門を閉づ
始聞傳上命　始めて上命の傳えられしを聞けば
定是賜中樽　定めて是、中樽を賜うならん
野鑪然樹葉　野鑪には樹葉を然き
山杯捧竹根　山杯は山根を捧ぐ
風池還更煖　風池　還って煖に更り
寒谷遂成暄　寒谷　遂に暄と成る
未知稻粱雁　未だ知らず　稻粱の雁
何時能報恩　何れの時にか能く恩に報いん

一句から六句までは庾信の境遇を説明しているが、圏點を付した箇所に陶淵明の作品の影響が見える。先ず二句目の喧は「飲酒」五の

結廬在人境　廬を結びて人境に在り
而無車馬喧。而も車馬の喧しき無し

を逆に使ったものと思われるし、三～六句目は、「桃花源記」序の

忽逢桃花林……自云先世避秦時亂、率妻子邑人、來此絶境、不復出焉（忽に桃花の林に逢う……自ら云う、先世秦時の亂を避け、妻子邑人を率いて、此の絶境に來たり、復た出でず、と）

とある部分を、又五句目の穉子は「歸去來辭」の

僮僕歡迎　僮僕　歡び迎え
稚子候門　稚子　門に候つ

の句を想起させる。但だ、三句目の枉道はまわり道して、ともとれるが、『論語』微子篇にある、柳下惠が三たび黜けられて人に答えた、

枉道而事人　何必去父母之邦（道を枉げて人に事うれば、何ぞ必ずしも父母の國を去らん）

をふまえるとすれば、正しい道を枉げて人に媚びて父母の邦即ち故國梁朝を去って北朝に仕えている、と二姓に仕えた恥しい身の上だと謙遜したニュアンスが出る。ともあれ六句目までは陶淵明を意識した表現になっている。

この作品の詩意を概略すると、一句目、梁王の修竹園は、宮室苑囿の樂しみを好んだ漢の文帝の第二子梁孝王が造った園の一つをいい、二句目、そこは貴顯の往來が絶えない俗世間であった（梁朝を喩える）、三・四句目、ところが行人庾信は忽ち道を枉げて陶淵明が描いたユートピア桃花源に來てしまった（北朝を喩える）、五・六句目、そこで妻子と隱者暮しをしていると、七・八句目、趙王からお酒が屆けられた。九・十句目、賜った酒を飲んだ事をいう。最後の四句は感謝の辭。

この詩は陶淵明の世界を借りていることが特徴になっているが、こういった型が作品①～⑦までの内容の大體の骨子なのである。つまり

(a)庾信自身の境遇・情況を説明すること、
(b)酒が屆いたこと
(c)それを飲んだこと
(d)その結果のこと（これには外の寒々しい景色が春のように暖くなった、という型と、醉態を述べる型とがある）
(e)恩を謝すこと。

これらは内容の形式面に於ける各作品に共通する基本的事項といえる。

次に修辭の面について見ると、作品②にも出ていたが各作品に共通する修辭として陶淵明の世界を言葉の上から、或はイメージの面で織り込んでいる事が擧げられる。又更に顯著な特徴として、賜った酒を仙酒、仙人から贈られた酒、と喩える手法が使われていることが注目される。例えば次の詩を見ると、

③「奉報答賜酒」

仙童下赤城　仙童　赤城に下り
仙酒餉王平　仙酒　王平に餉る
野人相就飲　野人　相い就きて飲み
山鳥一群驚　山鳥　一群驚く
細雪翻沙下　細雪　沙を翻して下り
寒風戰鼓鳴　寒風　鼓を戰ちて鳴る
此時逢一醉　此の時　一醉に逢えば
應枯反更榮　應に枯は反って榮に更るべし

一・二句目は庾信に酒が下賜された事をいう。冒頭の句は、魏の曹丕の「遊仙詩」に、

上有兩仙童　上に兩仙童有り
不飲亦不食　飲まず亦た食わず
與我一丸藥　我に一丸藥を與う

光曜有五色　光曜　五色有り

とある所を意識しよう。赤城は孫綽の「遊天台山賦」に

赤城霞起而建標（赤城に霞起ちて標を建て）

とあり、天台山へ登る時通る道。王平は『神仙傳』巻二にある神仙で王平が蔡經という者の家に降臨した時、神仙の麻姑も呼び宴會をしたが、途中で酒が盡きたので左右の者に、一貫の錢を餘杭の盧に與えて酒を買って來るようにと命じた。まもなく油囊一杯の酒が屆いた。

という話をふまえる。なおこの二句目の典故はⒶの他の詩でも使われており、巻三「和宇文京兆遊田」に

美酒余杭醉　美酒　余杭の醉い

芙蓉卽奉杯　芙蓉　卽ち杯を奉ぐ

とある。この詩は狩に行った樂しさを詠じたものだが、そこでの酒の美味さを喩えている。作品③は遊仙詩風の書き出しである。三・四句目は賜った酒を飲んだことをいう。野人卽ち田夫・農夫もやって來て、彼らと一緒に飲んでいると、山の鳥は一群となって飛び立った。陶淵明の作品に野人・山鳥の語の使用例は無いが、田舍住いの陶淵明が近隣の人々と共に酒を飲んだ情景はあるので、この三・四句目はそれを借りていよう。例えば陶淵明の「移居」二に

過門更相呼　門を過ぎれば更も相い呼び

有酒斟酌え　酒有らば之を斟酌す

「癸卯歲始春懷古田舍」に

日入相與歸　日入りて相與に歸り

壺漿勞近鄰　壺漿もて近鄰を勞う

とあるなど。後半五句目から八句目までは感謝の辭。八句目の枯木が榮木になるようだというのは、陶淵明の「榮木」序の

榮木念將老也（榮木は將に老いんとするを念うなり）

を逆手にとった發想と思われる。

作品③は遊仙詩と隱逸詩が融合したような作品になっているが、魏の曹丕の「遊仙詩」にいう、兩仙童が丸藥を與えた話を導入句にして、賜った酒をまるで仙酒、仙人から贈られた酒のようだと表現してある所が、庾信の意匠であり、新しい文學的境地開發の一端ともいえる。というのは庾信が陶淵明の世界を借りて作詩していることは作品②③から窺えるが、酒を頂戴した事に關しては、陶淵明の作品にも、例えば

「飲酒」九に

田夫有好懷　田夫　好懷有り

壺漿遠見候　壺漿もて遠く候われ

「飲酒」十四に

故人賞我趣　故人　我が趣きを賞し

挈壺相與至　壺を挈えて相與に至る

「飲酒」十八に

時賴好事人　時に賴いに好事の人

載醪祛所惑　醪を載せて惑う所を祛う

「連雨獨飲」に

故老贈余酒　故老　余に酒を贈り

乃言飲得仙　乃ち言う　飲まば仙を得んと、

といった描寫はある。だが、ここでは陶語に言う「田父」「故人」「故老」から酒を貰うのではなくいきなり仙人から貰うとする。これは庾信が單なる隱逸の世界を構築するのではなくて、その上に新しい遊仙

の世界を組み込もうとしていたからではなかろうか。隱者も確かに貴族社會の特殊な存在であるが、仙酒・仙人から贈られた酒と喩えれば、相手に敬意を表しつつ更に新奇な方向に展開し得る餘地が出る。作品③の例では賜った酒を飲んだ結果、枯木が榮木に變化するようだと表現しても不思議ではない雰圍氣になっている。これも一つの庾信が創造した新しい遊仙の世界であるが、重ねて次の作品を見ると、

①「蒙賜酒」

金膏下帝臺　金膏　帝臺に下り
玉瀝在蓬萊　玉瀝　蓬萊に在り
仙人一遇飲　仙人　一遇の飲
分得兩三杯　分け得たり兩三杯
忽聞桑葉落　忽として桑葉の落つるを聞き
正値菊花開　正に菊花の開くに値う
阮籍披衣進　阮籍は衣を披いて進み
王戎含笑來　王戎は笑を含みて來たる
從今覓仙藥　今より仙藥を覓むるに
不假向瑤臺　瑤臺に向うを假りず

一～四句目までは仙人の宴會の場面をいう。金膏は仙藥の一種。帝臺は仙人の名。玉瀝は玉のしづく。蓬萊は仙人の居る東の果ての島。一遇飲は陶淵明の「酬丁柴桑」に、

放歡一遇　歡を一遇に放にし
既醉還休　既に醉えば還り休す、

とある部分と、同じく「與殷晉安別」に

遊好非少長　遊好　少長に非ず
一遇盡殷勤　一遇　殷勤を盡す

とある部分をふまえた庾信の造語と思われる。五・六句目は、その仙酒が庾信に屆いたことをいう。桑葉落は桑落酒（桑葉が落ちる頃に釀す酒で、索郎ともいう）ができる頃をいい、菊花開は、『西京雜記』三に

菊花酒、令人長壽、菊花舒時、并採莖葉、雜黍米釀之、至來年九月九日始熟、就飲焉（菊花酒は人を長壽ならしむ、菊花の舒びる時、莖葉を并わせて採り、黍米に雜えて之を釀す、來年九月九日に至りて始めて熟せば、就いて飲む）

とある様に菊花酒ができる季節をいう。つまり去年仕込んだ桑落酒や菊花酒がちょうど飲み頃の時に仙人からお裾分け頂いたような美味しい酒が屆いた。七・八句目はその〝仙酒〟を堪能したことをいう。この二句は『世說新語』簡傲篇にある、

王戎弱冠詣阮籍、時劉公榮在坐、阮謂王曰偶有二斗美酒、當與君共飲、彼公榮者無預焉、二人交觴酬酢……（王戎弱冠にして阮籍に詣る、時に劉公榮坐に在り、阮、王に謂いて曰く、偶ま二斗の美酒有り、當に君と共に飲むべし、彼の公榮なる者は預かる無けん、と、二人觴を交えて酬酢する……）

という話をふまえている。更に七句目の披衣は陶淵明の「移居」二の

相思則披衣　相い思えば則ち衣を披き
言笑無厭時　言笑　厭く時無し

を意識しよう。九・十句目は賜った酒は仙藥にも勝るものだとお世辭をいう結び。

この詩は前半四句で遊仙ムードを盛り上げているが、後半が庾信の

創造した新しい遊仙の世界である。つまり庾信は所謂「遊仙詩」の丸薬・仙薬をもらって飲み、姿を變えて仙人世界に遊ぶという構想から、賜った酒を仙薬にみたてて、それを飲んだ酔態、酔い心地を「遊仙詩」の仙人境に遊ぶ境地に置き代え、その際に『世説新語』の酒好きの人物の事跡を使ったのである。こういった構成にしたことで、酒の效き目として簡傲、任誕の面も出せるし、明るく樂しい社交の詩らしくもなる。酒を飲んで仙界に遊ぶというモチーフは郭璞の「遊仙詩」其十四に

縱酒濠汜濱　酒を濠汜の濱に縱いままにし
結駕尋木末　駕を結びて木末を尋ねんとす
翹手攀金梯　手を翹げて金梯を攀じ
飛步登玉闕　步を飛ばして玉闕に登る
……後略……

とあるが、それをこのように構成したところが新しさになる。

『世説新語』の典故を使用導入した效果が更に活かされたのが次の作品である。

⑥「衞王贈桑落酒奉答」

愁人坐狹邪　愁人　狹邪に坐し
喜得送流霞　喜びて流霞の送られしを得たり
跂臆催酒熟　臆に跂ちて酒の熟すを催し
停杯待菊花　杯を停めて菊花を待つ
霜風亂飄葉　霜風　飄葉を亂し
寒水細澄沙　寒水　澄沙に細やかなり
高陽今日晚　高陽　今日晚れ
應有接䍦斜　應に接䍦の斜めなる有るべし

一句目の愁人は庾信自身をいう。狹邪は古樂府に「長安有狹邪(斜)行」があり、ここでは長安の地をいう。二句目の流霞は、『抱撲子』内篇二十祛惑にある、

項曼都という者が山中で修業し、十年後に家に歸って語った、「有仙人來迎我、共乘龍而昇天……中略……仙人但以流霞一盃與我、飲之輒不飢渴（仙人の來りて我を迎える有り、共に龍に乘りて天に昇る……仙人但だ流霞一盃を以て我に與う、之を飲めば輒ち飢渴せず）」

という話をふまえる。なお、流霞の語はⒶの作品中の卷三「奉和示內人」にも

定取流霞氣　定めて流霞の氣を取り
時添承露杯　時に承露の杯に添えん

と使われている。三・四句目はそれを飲む前のワクワクした氣持をいう。四句目は、『宋書』隱逸傳の陶淵明の傳記にある、

嘗九月九日、無酒、出宅邊菊叢中、坐久、値弘送酒（嘗て九月九日、酒無く、宅邊の菊叢中に出でて、坐すこと久し、弘の酒を送るに値う）

という姿を意識するだろう。五・六句目は外の寒々しい景色の描寫。七・八句目は庾信の酔態をいう。この二句は『世説新語』任誕篇にある、山簡が荆州刺史の時の酔態を人々が歌って言った、當時の童謠

山公時一醉　山公時に一醉すれば
徑造高陽池　徑ちに造る高陽の池
日暮倒載歸　日暮れて倒に載せて歸り
酩酊無所知　酩酊　知る所無し

復能乗俊馬　復た能く俊馬に乗り
倒箸自接籬　倒(さかしま)に白接籬を箸け
擧手問葛彊　手を擧げて葛彊に問う
何如幷州兒　何如ぞや、并州の兒に

をふまえる。作品⑥は作品①より更に生き生きとユーモラスになっている。一句目の愁人から結句の山簡の姿への展開は、賜った酒の效き目として絶大といえよう。

今まで見て來た例から、庾信が酒を賜ってその謝辭を詩にする時の構成の型として、『神仙傳』や「遊仙詩」をふまえ、仙人の酒に喩えること、『世說新語』任誕篇簡傲篇にみえる酒豪の事跡を引用すること、陶淵明の詩境を反映させること、が擧げられる。これらの基本的構成要素に適宜比重のかけ方に變化をつけて、酒を賜って有難い、嬉しいといったテーマを詩にしているのである。次の作品を見てみよう。

④「奉答賜酒鵝」

雲光偏亂眼　雲光　偏えに眼を亂し
風聲特噤心　風聲　特に心を噤す
冷猿披雪嘯　冷猿　雪を披りて嘯き
寒魚抱凍沉　寒魚　凍を抱きて沉む
今朝一壺酒　今朝　一壺の酒
實是勝千金　實に是れ千金に勝る
負恩無以謝　恩を負うて以て謝する無く
惟知就竹林　惟だ竹林に就くを知るのみ

前半四句は外の寒々しい樣子の描寫。五・六句目は酒を賜ったことをいう。五句目の今朝の酒は、陶淵明の「己酉歲九月九日」に、

何以稱我情　何を以て我が情に稱えん
濁酒且自陶　濁酒　且く自ら陶しまん
千載非所知　千載は知る所に非ず
聊以永今朝　聊か以て今朝を永うせん

とある部分と、「遊斜川」に

中觴縱遙情　中觴　遙かなる情を縱いままにし
忘彼千載憂　彼の千載の憂を忘れん
且極今朝樂　且つは今朝の樂しみを極めよ
朝日非所求　明日は求むる所に非ず、

とあるのを踏まえた造語だろう。六句目は、成公綏の「遊仙詩」にいう

西入華陰山　西のかた華陰山に入り
求得神芝草　神芝草を求め得れば
珠玉猶戴土　珠玉　猶お土を戴くがごとし
何惜千金寶　何ぞ千金の寶を惜しまん

の部分の影響が感じられる。成公綏は仙草・神芝草が得られたら千金の寶も惜しくないと言ったが、この寒空に今朝賜った一壺の酒は正に神芝草の如きもので、千金にも勝る、千載の憂いを忘れ、今朝を存分に樂しませてくれるものだ、という。七・八句目は恩を謝する言葉。七句目は陶淵明の「乞食」の最後の二句

銜戢知何謝　銜戢して何(いか)に謝すべきかを知らんや
冥報以相貽　冥報　以て相い貽らん

をふまえており、八句目は『世說新語』任誕篇にある「竹林七賢」の

故事をふまえて、陶淵明は恩に報いるのに冥報を以て貽らうとしたが、庾信は竹林の七賢の如く酒を堪能させて頂くことにする、という。作品④は、賜った酒の有難さを際立せるために前半四句が費やされ、そして五句目・七句目に陶淵明の語を用いて「遊仙詩」『世説新語』の典故の引用をより效果的にしている。

同じような發想を使った作品でも友人王褒から酒を贈られた場合は次のようになる。

⑦「答王司空餉酒」

今日小園中　今日小園の中
桃花數樹紅　桃花　數樹紅なり
開君一壺酒　君が一壺の酒を開く
細酌對春風　細やかに酌みて春風に對す
未能扶畢卓　未だ畢卓を扶くる能わざるも
猶足舞王戎　猶お王戎を舞わすに足る
仙人一棒酒　仙人　一棒の酒
判不及盃中　判ずるも盃中に及ばず

前半四句は王褒から贈られた酒を飲んだことをいう。隱逸詩風の書き出しである。一・二句目は陶淵明の「歸園田居」一に

榆柳蔭後簷　榆柳　後簷を蔭い
桃李羅堂前　桃李　堂前に羅る

とある庭の様子を想起させるし、三・四句目の春風に吹かれつつ君が贈ってくれた酒を飲むというのは、陶淵明の「擬古」其七の、

日暮天無雲　日暮れて天に雲無く
春風扇微和　春風　微和を扇ぐ
佳人美清夜　佳人　清夜を美し
達曙酣且歌　曙に達するまで酣い且つ歌う

とある部分をふまえ、又同じく「停雲」に

靜寄東軒　靜かに東軒に寄り
春醪獨撫　春醪　獨り撫す
良朋慰遙　良朋　悠遙たり
搔首延佇　首を搔きて延佇す

とある友を思う氣持をも籠めているように思われる。後半四句は飲んだ結果のこと（庾信の醉態）をいう。五句目は『世説新語』任誕篇にある、

畢茂世云、一手持蟹螯　一手持酒盃、拍浮酒池中、便足了一生（畢茂世云う、一手に蟹螯を持ち、一手に酒盃を持ち、酒池の中に拍浮せば、便ち一生を了るに足る、と）

畢卓の言をふまえる。又六句目は同じく任誕篇にある、

王長史、謝仁祖同爲王公掾、長史云、謝掾能作異舞、謝便起舞、神意甚暇、王公熟視、謂客曰、使人思安豐（王長史、謝仁祖　同に王公の掾と爲る、長史云う　謝掾能く異舞を作す、と。謝便ち起ちて舞い　神意甚だ暇なり。王公熟視して客に謂いて曰く、人をして安豐〔王戎〕を思わしむ、と。）

話をふまえる。また、酒を飲んで舞うという發想は、謝靈運の「逸民賦」に

有酒則舞　酒有れば則ち舞い
無酒則醒　酒無ければ則ち醒む

とあるのも意識するだろう。後半四句の詩意は、酒の池に浮かぶ畢卓を扶けるような醉いかたはしないが、王戎が醉って舞う風雅な氣分に

なった、甘露を受けるために仙人が掌を捧げもつ仙人掌の甘露も、盃の酒には及ばない、と。作品⑦は相手が友人だから(a)(b)は省略で(c)(d)に力點を置いている。前半四句は隱者風な雰圍氣で、仙人が結びの所に出ており、少しひねった型になっている。

以上、庾信が酒を贈られて嬉しい、有難いといったテーマを詩にする時の詠じ方を見た。これにより、基本的に各作品に共通する作法（修辭・構成）の特色として次の三點が擧げられる。

(1)陶淵明の世界を意識的に詩中に取り入れている。

(2)賜った酒を仙酒に喩える。

(3)賜った酒の效き具合・醉い心地を、『世說新語』任誕篇・簡傲篇などに見える酒豪の故事を引用して表現する。

次に庾信が何故こういった特色を出したのか考察しようと思う。そこに庾信の宮廷詩人としての姿勢が窺われると思われるからである。

（二）作法の特色にみられる庾信の姿勢

前節で述べた作法の特色(1)について考えるに、庾信は自分の存在を陶淵明のイメージに假託して主張したと推察される。

當時すでに鍾嶸が『詩品』の中品において陶淵明を擧げて、

……至如、歡言酌春酒、日暮天無雲、風華清靡、豈直爲田家語耶、古今隱逸詩人之宗也（觀言して春酒を酌む、日暮れて天に雲無し、風華清靡、豈に直に田家の語と爲さんや、古今隱逸詩人の宗なり）

といい、江淹が「雜體詩」三十首の中において「陶徵君田居」の題のもとに

雖有荷鋤倦　鋤を荷いて倦む有りと雖も
濁酒聊自適　濁酒もて聊か自ら適う

と詠じている。つまり、酒を嗜みながら田園生活を甘受した隱者詩人の元祖、という陶淵明觀は共通した認識になっていた。

次に詩題に〝酒〟を直接提示することについて注目する。歷代の詩の中で酒を詠じた詩、或は酒に言及した詩は、それこそ枚擧に遑が無いが詩題に〝酒〟が提示してある作品となると次の如くである。〔『全漢三國晉南北朝詩』に據る。表中の作品名・記事の項の作品名の上に附した○の數字は『樂府詩集』の卷數を示した〕

〈表二〉

時代	人名	作品名・記事
魏	曹操	㉗對酒
〃	曹植	對酒行（殆ど闕文）又〔㊴「箜篌引」〕
〃	嵇康	＊酒會詩七首
晉	荀勗	王公上壽酒歌（晉四廂樂歌の一つ）
〃	傅玄	上壽酒歌（晉四廂樂歌の一つ）㊺前有一罇酒行
〃	張華	（王公上壽歌―晉四廂樂歌の一つ）
〃	成公綏	王公上壽酒歌（晉四廂樂歌の一つ）
〃	陸機	㉔飲酒樂（丁福保注、樂府作還臺樂、乃陳陸瓊詩也）
〃	陶淵明	＊飲酒二十首、＊止酒　＊述酒
〃	趙整	＊酒德歌二首
〃	無名氏	㉔飲酒樂（『樂府詩集』は陸機の作とする、表中の陸機の同題の作品とは別物）

宋	何承天	⑲將進酒
〃	鮑　照	＊酒後
〃	孔　欣	㉛置酒高樓上（『樂府詩集』は樓を堂に作る）
梁	昭明太子	⑰將進酒
〃	簡文帝	㉛當置酒
〃	范　雲	㉗當對酒
〃	王僧孺	＊在晉安酒席數韻（丁福保注、藝文作詠姬人）
〃	張　率	㉗對酒
〃	劉孝威	＊九日酌菊酒
〃	高　爽	＊詠酌酒人
陳	後　主	㊺前有一樽酒行　＊五言畫堂…迎延命酒十韻成篇、＊初伏七夕…置酒陳樂各賦四韻之篇
梁←陳	張正見	㉗對酒、㊺前有一樽酒行、㊴置酒高殿行　＊賦得白雲臨酒
〃	江　總	㊴置酒高殿行
〃	岑敬之	㉗對酒
梁←北周	庾　信	㉗對酒歌（丁福保注、文苑英華作苑雲）＊聘齊秋晚館中飲酒、對酒、＊暮秋野興賦得傾壺酒、＊就蒲州使君乞酒、＊蒲州刺史中山公許乞酒一車未送、この他に蒙賜酒等七首がある

右のうち殆どが樂府題、或は歌辭であり、徒詩は＊印をつけたものだけである。嵇康に一首あるが何といっても陶淵明にまとまってあり、後、庾信までは趙整、鮑照、王僧孺、劉孝威、高爽らの作品が散發的にみえるばかりである。かくして、庾信に至って、まとまって酒を頂戴した謝辭の詩があらわれるのである。つまり、一群のこれらの詩の創作意圖がここに明らかに見てとれる。

〈表一〉からも明らかなように庾信は北朝のパトロンから樣々なものを下賜されているが、酒を賜った場合に限って詩で謝辭を述べている。これらの詩を受け取った人は本來なら啓で來るはずの謝辭が詩で來たのだから强い印象を持つはずである。酒を詠じた詩人といえば當然陶淵明が想起されるから、庾信→陶淵明のイメージが强調される結果になる。

次に特色(2)、賜った酒を仙酒にみたてる事について考えてみよう。一つは、酒の贈り主に對して敬意を表する意味がある。さらには、遊仙詩風な雰圍氣を出しつつ(d)（九九ページ參照）の伏線にもなっている。(d)には、特色(3)の典故を定石のように使っているが、特色(2)を直接使う場合もある。例えば、作品⑤「正旦蒙趙王賚酒」の最後の所に

成都已救火　成都　已に火を救う
蜀使何時廻　蜀使　何れの時にか廻らん

とある。この二句は『神仙傳』卷五にある、「欒巴噀酒」の故事をふまえ、正月元旦に趙王から賜った酒は仙酒の如きものであるから、それを飲んだ庾信は欒巴のように成都の火事を消せた、その眞僞は蜀使が何時か歸って來て證明するであろう、という。同じ典故を使っても卷四「見遊春人」の詩では、長安の春の日に浮かれる人々の姿を描いた最後の所で、

那能學噀酒　那ぞ能く噀酒を學ねん
無處似欒巴　欒巴に似たる所無し

とあり、ここでは欒巴のようにはできないと言っている。作品⑤は趙

王から賜った酒だから欒巴のような事も可能になる。つまり素晴しい酒だと敬意を表したのである。

次に特色(3)について見るに、賜った酒が大變よく效いたということを、社交の詩らしく明るくユーモラスに描き出すことを意圖している。『世説新語』の任誕篇、簡傲篇中の典故を引用する所には庾信の姿勢が窺われよう。

以上、「蒙賜酒」等の一連の作品の作法に見られる特色から庾信の宮廷詩人としての姿勢が明瞭になる。すなわち、陶淵明ふうの酒好きな隱者詩人であって、『世説』の人物風の酒豪のタイプも兼ね、時に仙界に遊ぶ、という超俗の姿である。

そこで次に庾信は何故こういった作品を作ったのか、という點について考察する。

(三) 北朝に仕える庾信の背景

庾信が北朝に仕えたのは、西魏に梁朝の使者として赴いている(時に三十六歳)間に西魏が梁朝を滅したので、そのまま西魏に留められ、以後心ならずも西魏北周と仕えざるを得なかった、という事情による。

庾信はその北朝で大變優遇された。庾信が優遇されたのは、そもそも庾信が在梁時代に得ていた名聲によるが、實際に北朝にとって役立つ有能な宮廷詩人だったからである。これは例えば『庾子山集』に殘る庾信が北朝(人)のために作った作品に、郊廟歌辭約65首(卷六)、表約8首(卷七)、讚約28首(卷十)、銘約3首(卷十二)、碑約14首、誌銘約21首(卷十五、十六)、他に敎傳文序等の所謂る實用にかなうジャンルの作品が多いことからも肯けよう。

「蒙賜酒」等の一連の作品は、實用にかなう作品が歡迎され評價される北朝で、庾信が有能な宮廷詩人として生きて行く中から創造されたものなのである。こういった作品は、庾信と同じような素地を持っていたと思われる梁朝の詩人で亡國後陳朝に仕えた人々にも無いし、北周へ行き庾信と同じように優遇された王褒にも無い。王褒が優遇されたのは、南朝の名門貴族ということもあるが、書家としての技量をかわれたからである。『顏氏家訓』卷七雜藝第十九に、

王褒　地胄清華　才學優敏、後雖入關亦被禮遇、猶以書工　崎嶇碑碣之間、辛苦筆硯之役、嘗悔恨曰、假使吾不知書、可不至今日邪(王褒　地胄清華にして才學優敏、後に關に入ると雖も亦た禮遇を被る、猶お書の工(たくみ)を以てのごとし、碑碣の間に崎嶇し、筆硯の役に辛苦す、嘗て悔恨して曰く、假し吾をして書を知らざれしむれば、今日に至らざるべし、と)

とある。

「蒙賜酒」等の作品は、優遇されているとはいえ囚われの身の宮廷詩人、という庾信の立場から書かれたものである。從って第二章(二)で見た作法の特色は、隱者を氣取りつつ保身をはかる處世術の一端と見なすことができる。例えば庾信の境遇を説明する(a)では、②行人忽枉道、……未知稻樂雁(生活のために所定めず行き來する雁のような私)、③應枯反更榮、⑥愁人坐狹邪、といい、又、庾信の居る所は寒々しい所として描いている。②12・13句目、③6・7句目、④1 2 3 4句目、⑥5・6句目、これらの自然描寫が必ずしも北地の自然を直接詠じたものでないことは⑥からも分る。これは賜った酒の效き目、又その恩をより效果的にするための修辭であり、相手の同情を誘う工夫ともいえよう。

次に(c)の賜った酒を飲む場合について見ると、隱者風に飲む姿（②③④⑥⑦）、或は『世說』風の酒豪のように飲む（①）姿に描いている。これは庾信に世俗的野心が無いことを示そうとしているのではなかろうか。

また、飲んだ結果をいう(d)は、第二章(二)で見た如く、賜った酒を堪能し、大喜びして醉拂う姿になっている。これには酒に耽溺し世を韜晦しようとする目論みが感じられる。

「蒙賜酒」等の酒を賜った禮を述べるという前例の無いテーマの作品群は、北朝に囚われの身の宮廷詩人という特殊な立場に置かれた庾信にしてはじめて創造し得たものである。これらの作品は〝禮狀〟の主旨もさることながら、構成・作法の面から見ると、庾信の北朝での身の處し方、保身への心配りが印象的な作品になっている。これは逆にいえば庾信が北朝で樣々な物を下賜された中で、酒を賜った場合にのみ禮を詩で述べた意圖を表すものともいえる。その最も端的なあらわれが、酒好きの隱者詩人と當時すでに定評のあった陶淵明の世界を意識的に借りていることである。陶淵明の世界を借りて作詩した例は庾信の作品でも例えば「歸田」（卷四）等幾例があり、隱逸への思慕を詠じているが、「蒙賜酒」等の所謂社交の詩に於いて、より積極的に陶淵明に假託した姿を印象付けようとしていることが窺える。更に詩題に酒を直接提示する手法を多用して酒好きを强調し、又『世說』の簡傲・任誕篇中の酒豪の事跡にもっぱら自らの醉態を比している。これらは全て庾信に世俗的な野心が少しも無く、ひたすら酒に耽溺している生き方を示すものであり、世を韜晦する保身の術なのであった。

注(1)　この詩は丁福保の注に、六朝詩集作沈約、因初學記相次而誤也　とある。

(2)　この詩を徐陵の在梁時代の作としたのは、羊兗州が『梁書』卷三九に傳を持つ軍人羊侃と推定されるからである。本傳に據れば、羊侃は中大通三年に兗州刺史になっており、侯景の亂の時、梁朝に忠義を盡して戰死している。後繼ぎの鵾は承聖三年に沒したが兗州刺史になっていない。徐陵は侯景の亂の時東魏に拘留されており後に南歸して陳朝に仕えた人である。以上の事から徐陵の在梁時代の作品とみた。

(3)　在梁時代の作と推定される作品にも、酒を詠出した例があるが（「詠畫屏風詩」二十四首等）本稿の主旨に關係が無いので除いた。